人文主義者のナチズムに対する抵抗（２）
―コンラート・ツィークラーの場合―

曽　田　長　人

はじめに

本論は、「人文主義者とナチズム――その抵抗・傍観・協調の類型をめぐる考察――」[1] という研究課題の一環である。最初にこの課題の概要、趣旨について、簡単に述べておく[2]。ドイツ第三帝国（以下、第三帝国と略）における代表的な人文主義者[3] とナチズムとの関わりを、抵抗・傍観・協調という三つの類型に大別する。そして両者の関わりの具体的なあり方、学問的・社会的な背景、両者の関わりに対する第二次世界大戦後の捉え方などを検討する。これによってドイツ・ヨーロッパの重要な文化的伝統の一つである人文主義の明暗を、思想史的な視座から明らかにすることを目的としている。

本論は、ナチズムへの抵抗を行った人文主義者の一人としてコンラート・ツィークラー（Konrat Ziegler）を考察の対象とする。ナチ政権はその成立直後（1933年）、「職業官吏再雇用法」を制定する。これによってユダヤ系、「国民として信用できない」と見なされた（大学教員を含む）公務員の多くが、当初例外条項があったものの、解雇された。ツィークラーはヴァイマル共和国の護持に尽力しており、1933年ドイツの大学を解雇された学者の一人であった。彼は第三帝国下、知人のユダヤ系の銀行家、その家族の国外移住を援けるため、当時のドイツの法律で禁止されていた財産の国外への持ち出しに協力した。しかしこの試みは当局に摘発され、ツィークラーは有罪となった。しかしこうして罰を受けた後も、ユダヤ系の元同僚を匿うなどした。

1）　謝辞を参照。

2）　詳しくは「人文主義者のナチズムに対する協調―リヒャルト・ハルダーの場合―」（東洋大学経済研究会『経済論集』第44巻２号、2019年）pp.165-166を参照。

3）「人文主義Humanismus」、「人文主義者Humanist」とは多義的な概念である。本論において人文主義とは「ギリシア・ローマ古典古代との取り組みを通して、人間や文化の形成を目指す運動」、人文主義者とは「古典文献学者、古代史家、古典語教師」として主に理解する。

論述の順序は、以下のとおりである。第一章においては、ツィークラーの出自と経歴について整理する。第二章においては、ナチ政権の成立以前の彼の研究について考察を行う。第三章においては、ツィークラーによるナチズムとの関わり、それと彼の研究との関連を検討する。第四章においては、第二次世界大戦後の彼の活動、それとナチズムとの関連を考察する。

第一章　ツィークラーの出自と経歴

ツィークラーは1884年、商人の息子としてブレスラウに生まれた[4)]。彼のミドルネームの一つはFürchtegott（神を畏れよ）といい、彼は後年、自らの４人の息子すべてに同じミドルネームを付けるに至る[5)]。ここに、ツィークラーの敬神的な面が表れている。ブレスラウのギムナジウムを1902年に卒業した後、ブレスラウ大学で七学期、古典文献学、歴史学、考古学を修めた。その間、一学期をベルリン大学で過ごし、ドイツの当時の代表的な古典文献学者であったウルリヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフ（Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff）の薫陶を受けた。1905年には、ブレスラウ大学古典文献学科教授エドゥアルト・ノルデン（Eduard Norden）の課した懸賞論文に応募し、この論文の一部を基にフランツ・スクッチュ（Franz Skutsch）の下で博士の学位を取得した（同論文はノルデンに献呈されている）。1907年には、同じくスクッチュの下で教授資格を取得した。ノルデンとスクッチュは共にユダヤ系の碩学であった。ツィークラーは後年、ユダヤ系の人々を援けるに至る。かかる試みは、その理由の一端をブレスラウ時代の学恩に有したことが考えられる。1910年には、ブレスラウ大学の員外教授に就任した。第一次世界大戦には1915年から従軍し、1917年からブルガリアのドイツ公使館において報道専門担当官として主に通訳の業務に携わった。同大戦の終了後、教職に復帰し、1920年にはブレスラウ大学の正教授となった。

ヴァイマル共和国において、ツィークラーは大学内外の政治活動と精力的に関わった。彼はドイツ民主党の創設者の一人で、1919年から1933年まで同党に属し、一時期、同党の中央執行部の一員となった（同党はユダヤ系の党員が多く、ユダヤ人政党と呼ばれた）。ヴァイマル共和国の護持を目的とするドイツ国旗団や、ドイツ平和協会にも所属した。「反ユダヤ主義を防ぐ会」には1920年から1933年まで属し、1928年には執行部に所属した。1923年には、グライフスヴァルト大学へ赴任する。同大学の在職中、1926年から1927年にかけて哲学部の学部長、1928年から1929年にか

---

4)　以下の記述は、主に次の文献による。Baumgarten Roland: Konrat Ziegler, in: Der Neue Pauly. Supplemente Bd.6, Geschichte der Altertumswissenschaften. Biographisches Lexikon, Stuttgart/Weimar, 2012, S.1349-1351. Mensching, Eckart: Verfolgte Philologen im Berlin der dreißiger Jahre – Konrat Ziegler（1884-1974）vor Berliner Gerichten, in: Nugae zur Philologie-Geschichte Ⅲ, Berlin 1990, S.5-47. Konrat Ziegler, in: Wikipedia（ドイツ語版）。

5)　Kratz-Ritter, Bettina: Konrat F. Ziegler, ein „Gerechter unter den Völkern“ aus Göttingen, in: Göttinger Jahrbuch, Bd.50, 2002, S.187.

けて同大学の学長を務めた。ドイツ第二帝国の象徴たる「黒－白－赤」の国旗とヴァイマル共和国の象徴たる「黒－赤－金」の国旗の掲揚をめぐる「国旗掲揚闘争」は、グライフスヴァルト大学においても起きた。その際ツィークラーは学長として、相対立する立場の融和に努めた。1932年には、ドイツ民主党の推薦でプロイセン邦議会の選挙に出馬した（落選）。筋金入りの民主主義者としてのツィークラーは、グライフスヴァルトのナチ関係者との対立に陥り、彼らの敵と見なされる(詳しくは、第三章の１を参照)。

1933年５月には「職業官吏再雇用法」を理由にグライフスヴァルト大学を休職処分になり、同年９月には同大学を解雇された。その後ツィークラーは、家族と共にベルリンへ移住する。当地で彼は、家族を養うため、知人のユダヤ系銀行家の息子の家庭教師となった。「水晶の夜」(1938年）の後、この銀行家は国外移住を決意する。彼の依頼に応じてツィークラーは当時のドイツの法を犯し、高額の宝石、現金をドイツからオランダへ持ち出すのを手伝う。しかし仲間が国境で捕まり、ツィークラーも犯罪者グループの一員として1939年１月に逮捕された。ほぼ１年に及ぶ勾留後、外国為替条例に違反した廉で、1940年にベルリンの裁判所から１年半の禁固刑と罰金の判決を受けた。この禁固期間から拘留期間を差し引いた４ヵ月、入獄を余儀なくされ、罰金は恩赦により免除された。1943年11月22日、ベルリンのツィークラー家は空襲のため全焼した。蔵書など財産をすべて失った彼は、姉が住むハルツのオステローデへ移った。当地においても彼は、研究を継続した。

1945年４月、アメリカ軍がオステローデを占領した。ツィークラーはイギリスの軍事政府から、オステローデ地区の郡長へ任命された。この仕事を1946年11月まで果たした後、彼はゲッティンゲンへ転居した。ツィークラーはグライフスヴァルト大学、ライプツィヒ大学、エアランゲン大学からの招聘を断り、ゲッティンゲン大学の客員教授の職に就くことを希望したためである。彼は1950年にようやく、同大学の客員教授に任命された。その後、教授活動に携わり、1965年ゲッティンゲン大学を退職し、翌年、退職した正教授の称号を得た。

ゲッティンゲンにおいてもツィークラーはヴァイマル共和国期と同様、政治的に活動した。1969年にはゲッティンゲンの名誉市民となった。1964年にはニーダーザクセン州の大功労十字勲章、ギリシアのアリストテレス大学の名誉博士号が与えられ、1969年にはロンドンのギリシア振興協会の名誉会員へ推挙された。1974年、様々な名誉に包まれる中、90歳の誕生日の直前にゲッティンゲンで亡くなっている。2001年、ツィークラーは「諸国民の中の正義の人」の一人へ数えられた。これは、ナチスのユダヤ人絶滅政策からユダヤ人を助けるため自らの命を危険に曝した、非ユダヤ人へ与えられるものである（日本の外交官、杉浦千畝氏も、これに数えられている)。

第二章　ナチ政権の成立以前におけるツィークラーの研究

高齢と健康に恵まれたツィークラーの研究は、量的に多いのみならず分野的にも多岐に及んだ。彼の80歳の誕生日を祝して作成された業績目録[6]、その後、彼の90歳の誕生日に献呈されるはずであった最近10年の業績目録には、計785の作品が収録されている[7]。ツィークラーの研究は、生涯にわたった分野と特定の時期に現れた分野に分けて考えることができる。前者については第一次世界大戦前、同大戦中にその萌芽がおおむね出揃い、そのほとんどが第二次世界大戦後にかけて展開している。その研究分野とは、Ⅰ．古代ギリシア・ローマの神話や宗教に関する研究、Ⅱ．プルタルコスあるいはⅢ．キケロに関する研究、彼らのテキストの批判的な校訂、Ⅳ.『古典的古代学のパウリー百科事典』（以下『パウリー百科事典』と略）の項目執筆、Ⅴ．ヘレニズムの文化・思想に関する研究、である。後者については、Ⅵ．ドイツ文学に関する著作（第一次世界大戦の前後、同大戦中）が挙げられる。以下この六つのグループに定位して、ナチ政権の成立以前（1905年から1932年まで）のツィークラーによる研究を概観してゆく。

Ⅰ．古代ギリシア・ローマの神話や宗教に関する研究

ツィークラーによる博士論文は、『ギリシア人の下での祈りの形式についての選ばれた疑問』[8]である。この論文はラテン語で書かれ、ホメロス、ピンダロス、プラトン、悲劇詩人、喜劇詩人、ローマの詩人などの作品に現れた、様々な神々への呼びかけ、祈りの形式を考察している。その後ツィークラーは、４世紀ローマで活動した元老院議員、占星術師であるフィルミクス・マテルヌス（Firmicus Maternus）の研究を手掛けた。それは、『フィルミクス・マテルヌス『異教の誤りについて』研究序説』という教授資格請求論文、『異教の誤りについて』の批判的な校訂を経た版に結実した[9]。マテルヌスは後年キリスト教へ改宗し、『異教の誤りについて』においてはキリスト教以外の宗教を絶滅するよう、読者に呼びかけている。ツィークラーの師スクッチュはマテルヌスによる占星術書『マテーシス』を校訂しており、ツィークラーによるマテルヌスへの関心は師に触発されたことが考えられる（1913年に刊行された同書の第８巻に、ツィークラーはスクッチュなどによる校訂の協力者として名を連ねている[10]）。ツィークラーはマテルヌスに関して上の教授資格請求論

6）Bibliographie Konrat Ziegler, zum 12. Januar 1964, zusammengestellt von Hans Gärtner, Stuttgart 1964.

7）Bibliographie Konrat Ziegler 1964-1973, zum 12. Januar 1974, zusammengestellt von Hans Gärtner, Stuttgart 1974.

8）Ziegler, Konrat: De precationum apud Graecos formis quaestiones selectae, Breslau 1905.

9）両者は合わせて、Ziegler, Konrat: Iuli Firmici Materni V.C. De errore profanarum religionum, Leipzig 1907に収録された。

10）Iuli Firmici Materni Matheseos libri Ⅷ. Ediderunt W.Kroll et F. Skutsch in operis societatem assumpto K.Ziegler.

文以外にも、写本の読み方などに関する論文を著している[11)]。

上で触れた博士論文、教授資格請求論文の問題圏から、新プラトン主義[12)]、ヘシオドス[13)]、ギリシアの民衆宗教に関する論文が生まれる[14)]。『宗教史の教科書』(1912年) においてツィークラーは、「ギリシアのテキスト」「ローマの宗教」の章[15)] の執筆を担当している（これは彼の博士論文の内容と、一部重なっている)。しかしその後、彼の研究対象は、古代ギリシア・ローマ以外の文化・文明圏における神話や宗教にも広がってゆく。それを表すのは、『人間の生成と世界の生成　ミクロコスモス理念の歴史への寄与』という小冊子である。ツィークラーは本書においてミクロコスモス理念の歴史的な系譜を辿り、「プラトンの饗宴、エンペドクレス、オルフェウスの混淆」および旧約聖書の創世記第 2 章第18節以下という、二つの伝承の軸を想定する。そして両者の起源には、バビロンの人類生成説話があったという[16)]。このようにツィークラーはヘレニズムとヘブライズムの伝承の出発点に、オリエントの宗教を想定している。

第一次世界大戦後、ツィークラーは『宗教学のハンドブック』(1922年) に「ギリシア人、ローマ人、ヘレニズム・ローマ世界におけるオリエントの諸宗教」に関する項目を執筆した[17)]。この項目との関連下、彼は学問的な関心を持つ一般読者を対象に、『伝説と学問における世界の没落』[18)]（1921年）および『伝説と学問における世界の誕生』[19)]（1925年）を、ヴィーン大学の天文学者ザームエール・オッペンハイム（Samuel Oppenheim）との共著によって刊行している。この二つの著作においてツィークラーは、それぞれ伝説の部分の執筆を担当し、古代ギリシア・ローマ、オリエントの諸民族のみならず、インド人、中央アメリカ人、ケルト人、アラビア人、アジア人、アフリカ人、アメリカ人、オセアニア人などによる、世界の没落と誕生に関するさまざまな神話を要約し、比較して

Fasc. Ⅱ. BT, 1913.

11）Ziegler. Konrat: Neue Firmicus-Lesungen, in: Rheinisches Museum für Klassische Philologie, Bd.60, 1905, S.273-296.

12）Ziegler, Konrat: Zur neuplatonischen Theologie, in: Archiv für Religionswissenschaft, Bd.13, 1910, S.247-269.

13）Ziegler, Konrat: Das Proömium der Werke und Tage Hesiods, in: a. a. O., Bd.14, 1911, S.393-405.

14）Ziegler, Konrat: Die altattischen Komiker und die Volksreligion, in: Festschrift zur Jahrhundertfeier der Universität zu Breslau, Breslau 1911, S.440-452.

15）Ziegler, Konrat: Griechische Texte, Römische Religion, in: Textbuch zur Religionsgeschichte, hrsg. v. Eduard Lehmann, Leipzig 1912, S.297-355.

16）Ziegler, Konrat: Menschen- und Weltenwerden. Ein Beitrag zur Geschichte der Mikrokosmosidee, Leipzig 1913, S.44.

17）Ziegler, Konrat: Die Griechen, Die Römer, Die orientalischen Religionen in der hellenistisch-römischen Welt, in: Handbuch der Religionswissenschaft, hrsg. v. Johannes Leipoldt-Leipzig, Berlin 1922, S.3-38.

18）Ziegler, Konrat/Oppenheim, S.: Weltuntergang in Sage und Wissenschaft, Leipzig 1921.

19）Ziegler, Konrat/Oppenheim, S.: Weltentstehung in Sage und Wissenschaft, Leipzig 1925.

いる。その際、世界の没落に関しては、様々な民族における洪水伝説、炎による世界の破壊、最後の審判（終末論）などを考察した。世界の誕生に関しては、様々な文化・文明圏の創世伝説にあって「根源の海が最初にある」[20] こと、そこから地球や世界が構築され、夜よりも光が後に登場する、といった共通点[21] を指摘している。ここから「人間の思考法則は至る所で同じである」[22] という、注目すべき考えを導き出している。これは20世紀初期の多くの人文主義者にとって、異質に響く主張であった。なぜなら、彼らにとって古代ギリシア・ローマの他の文化・文明に対する優位は自明であったからである（1920年代から1930年代にかけてドイツの人文主義者の間で大きな影響を揮った古典復興の精神運動である、ヴェルナー・イェーガー[Werner Jaeger]を中心とする「第三の人文主義」も、同様の考えに依拠していた[23]）。

以上でまとめたような、特に古代ギリシア・ローマに関する神話研究が認められたためか、ツィークラーは1923年から『ギリシア・ローマ神話に関する詳細な事典』[24] 所収の項目を執筆した。1924年には同事典の第５巻に、「神統記」[25] に関する長文の項目を発表している。のみならずヴィルヘルム・ハインリヒ・ロッシャー（Wilhelm Heinrich Roscher）が同年に亡くなった後、彼から同事典の編集の仕事を引き継いだ。

Ⅱ．プルタルコスに関する研究、彼のテキストの批判的な校訂

ツィークラーによるプルタルコスへの関心は、ベルリンのシャルロッテ財団が1906年に課した懸賞課題「プルタルコスによる伝記作品の伝承」にツィークラーが応募したことに遡る（彼の論文は副賞を得た[26]）。ツィークラーは教授資格の取得後、プロイセン国家からイタリア旅行のため500マルクの奨学金を受給し、当地の図書館でプルタルコス『対比列伝』[27] の手稿を比較した。その結果は、『プルタルコス『対比列伝』の伝承史』（1907年）に結実した。1908年から「プルタルコス研究」という名の一連の論文が、1932年まで６回、13章に分けて――1914年から1926年にかけての中断

20）A. a. O., S.75.

21）A. a. O..

22）A. a. O., S.77.

23）拙論「人文主義者のナチズムに対する傍観－ヴェルナー・イェーガーを手がかりに－」（『経済論集』東洋大学経済研究会、第45巻２号、2019年）pp.77-78。

24）Ausführliches Lexikon der griechischen und römischen Mythologie. Im Verein mit vielen Fachgenossen hrsg. v. W. H. Roscher, Leipzig/Berlin 1924-1937.

25）Ziegler, Konrat: a. a. O., Bd.Ⅴ, 1924, S.1469-1554.

26）Gärtner, Hans: Konrat Ziegler, in: Realencyklopädie der classischen Altertumswissencschaft (im folgenden:RE), Register der Nachträge und Supplemente, München 1980, S.Ⅴ.

27）Vitae parallelae.これは、日本では一般に『英雄伝』の名で知られている作品である。

を挟んで――『古典文献学のためのライン博物館』に発表される（1933年以降も続けて発表）。その内容は、『対比列伝』の写本の由来や信憑性、様々な手稿の間の異同、写本系統図などを問うたものである。1911年には古典文献学を専攻とする学生を対象として、『対比列伝』の中からグラックス兄弟を扱った巻のテキストを刊行している。これは批判的な校訂を経て、注釈が付されている。1914年からはスウェーデンのプルタルコス研究者クラエス・リンスコック（Claes Lindskog）と共同で、プルタルコス『対比列伝』の批判的校訂版の刊行を開始した（1932年までに3巻が刊行）。これは、『対比列伝』の最も信頼の置けるテキストと見なされている（岩波文庫、ちくま学芸文庫、京都大学学術出版会西洋古典叢書に所収の『英雄伝』の邦訳は、いずれもこのツィークラーなどによる校訂を経た版を底本としている）。

Ⅲ．キケロに関する研究、彼のテキストの批判的な校訂

ツィークラーによるキケロへの関心は、マテルヌスに関する研究と同様、師のスクッチュに触発された[28]。ツィークラーはイタリア滞在中、キケロのテキストが記されたヴァチカン図書館所蔵の再録羊皮紙の読み方も研究した。そしてトイプナー社から刊行された決定版キケロ全集の一環として、1915年に『国家論』[29]（ツィークラーの生前に七版）、1917年に同書から「スキピオの夢」[30]（1923年に再刊）を、批判的な校訂を施して刊行している。キケロの『国家論』は、その後もツィークラーの関心を惹いた。ツィークラーは「キケロ『国家論』に寄せて」[31]（1916年）、「キケロ『国家論』のテキストとテキストの歴史」[32]（1931年）を発表している。

Ⅳ.『パウリー百科事典』の項目執筆

同事典は1894年から1980年にかけて刊行された、ギリシア・ローマ古典古代に関する世界で最も網羅的な百科事典、参照作品である（39519のキーワードを収録）。同事典は、ギリシア・ローマ古典古代における著名な作品、同古典古代に関する事項を通例ほぼ完全に解明している。最終

28）「私が『国家論』という著作との詳しい取り組みへ初めて導かれたのは、1906年になってからのことである。当時、私は別の目的のためローマに滞在し、（中略）尊敬する師フランツ・スクッチュから、以下の委託を受けた。つまり、議論の余地が多くあるエンニウスの断片が伝承されているキケロの再録羊皮紙の中の一箇所を改めて吟味する、という委託を。」（Ziegler, Konrat: Zur Iphigeneia des Ennius, in: Hermes. Zeitschrift für Klassische Philologie, Bd.85, 1957, S.496.）

29）M.Tulli Ciceronis scripta quae manserunt omnia. Fasc.39: De re publica. Recognovit K.Ziegler, Leipzig 1915.

30）M.Tullius Cicero. Somnium Scipionis. Recensuit K. Ziegler Leipzig 1917.

31）Ziegler, Konrat: Zu Cicero de re publica, in: Hermes, a. a. O., Bd.51, 1916, S.261-272.

32）Ziegler, Konrat: Zu Text und Textgeschichte der Republik Ciceros, in: a. a. O., Bd.66, 1931, S.268-301.

的には約1100人の専門家の共同作業によって、本体が68巻、補遺が17巻の全85巻によって完結した。ツィークラーは1912年から、同事典の項目執筆に加わっている（当初は、主に古代シチリアの地理と歴史に関する項目を執筆）。この事典は、ブレスラウ大学と所縁のある古典文献学者が中心となって編集されてきた（同事典のプロジェクトを立ち上げたゲオルク・ヴィッソーヴァ[Georg Wissowa]、彼の仕事を引き継いだヴィルヘルム・クロル[Wilhelm Kroll]、クロルの仕事を引き継いだカール・ミッテルハウス[Karl Mittelhaus]は、いずれもブレスラウのギムナジウムを卒業し、ブレスラウ大学で古典文献学を修め、当地のギムナジウムや大学で教鞭を執っていた[33]）。こういった背景の下で、ツィークラーへ『パウリー百科事典』の項目を執筆する依頼の来たことが推測される。ツィークラーはナチ政権の成立以前、『パウリー百科事典』に133の項目を執筆した。その中には「ゴルゴGorgo」[34]「リュコプロンLykophron」[35]など執筆分量が多く、独立した論文に値する項目も含まれている。多岐にわたった項目執筆のテーマから、論文のテーマが得られたこともあったようである（1924年の「ゴルゴ神話における鏡のモチーフ」[36]など）。

Ⅴ．ヘレニズムの文学・思想に関する研究

1913年、ツィークラーはヘレニズムの詩人カリマコス（Kallimachos）に関する「カリマコスのゼウス賛歌に寄せて」[37]を発表している。この論文においてツィークラーは、カリマコスが立てた神々の秩序と現世の秩序の並行関係に注目し、カリマコスの思想が占星術へ転向を遂げたのは、ヘレニズム時代のエジプトの影響によるものとしている[38]。

Ⅵ．ドイツ文学に関する著作

ツィークラーは第一次世界大戦の直前から同大戦の直後まで、ゲールハルト・ハウプトマン（Gerhart Hauptmann）、レッシング、ゲーテという三人のドイツの詩人について文章を著している。

ハウプトマンはツィークラーと同様、シュレジエン生まれの詩人であった。ハウプトマンは周

33）Scholz, Udo W.: Die Breslauer Klassische Philologie und die Realenzyklopädie der klassischen Altertumswissenschaft, in: Jahrbuch der Schlesischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Breslau, Bd.62-64, 2001-2003, S.320-324.

34）蛇の髪を生やし、羽を付けた怪物。Ziegler, Konrat: Gorgo, in: RE, a. a. O., Erster Reihe, 14.Halbband, Stuttgart 1912, S.1630-1655.

35）前３世紀ギリシアの悲劇詩人。Ziegler, Konrat: Lykophron 8, in, RE, a. a. O., 26. Halbband, Stuttgart 1927, S.2316-2381.

36）Ziegler, Konrat: Das Spiegelmotiv im Gorgomythus, in: Archiv für Religionswissenschaft, Bd.24, 1926, S.1-18.

37）Ziegler, Konrat: Zum Zeushymnus des Kallimachos, in: Rheinisches Museum für Klassische Philologie, Bd.68, 1913, S.336-354.

38）A. a. O., S.345.

知のように労働者の窮状に関心を寄せ、ドイツ第二帝政下「社会民主主義の詩人」と見なされた。1911年にはノーベル文学賞を受賞したにもかかわらず、ドイツ国家から忌避されていた。それを表すのは、彼が1913年、ドイツ解放戦争100周年を記念して創作した「ドイツの韻律における祝祭劇」[39] の受容[40] である。本作品は、ブレスラウにおいてマックス・ラインハルト（Max Reinhardt）の演出によって上演された。しかしプロイセン皇太子ヴィルヘルム・フォン・プロイセン（Wilhelm von Preußen）の介入によって、公演途中で上演が打ち切られた。鈴木将史はこの劇が貴族や軍人協会の槍玉に上がった問題点を、１．プロイセン宮廷の軽視もしくは無視、２．ナポレオンを賞揚するかのような表現、３．英雄たちの矮小化、４．戦勝意識の希薄さ、５．作品全体に指摘し得る愛国心の欠如、という五点に帰している[41] が、これに加えて（４、５と関連して）本作品は平和主義的な色彩が強いと見なされた点も挙げられる[42]。かかる上演中止という事態を前にして、ドイツの様々な都市で抗議声明が挙げられた。「ドイツの韻律における祝祭劇」はツィークラーの関心を惹いており、その理由としては本作品が古代ギリシアの衣装を纏っていたことも考えられる[43]。彼はハウプトマンを擁護する論陣を張り、『ブレスラウ新聞』に「詩的な行為としてのゲールハルト・ハウプトマンの祝祭劇」[44] という文章を寄稿した。この文章においてツィークラーはハウプトマンの作品を、「世界文学の歴史の中で名誉に満ちた場を占めるだろう」[45] と絶賛している。その後もツィークラーはハウプトマンを敬愛し、後者をアグネーテン村に訪問している[46]。ヴァイマル共和国期のツィークラーを特徴付ける民主主義、平和主義への賛同は、こうしたハウプトマンの作品を支持する彼の姿勢の中に、すでに現れていたと言える。

1918年、ツィークラーは「レッシングのラオコーンと学校」という文章を発表している。ツィー

39）Hauptmann, Gerhart: Festspiel in deutschen Reimen.

40）これについては、鈴木将史「G.ハウプトマン『ドイツ韻律による祝典劇』作品受容史（その１）」（『小樽商科大学人文研究』第129輯、2015年）pp.43-63、同上「G.ハウプトマン『ドイツ韻律による祝典劇』作品受容史（その２）」（『小樽商科大学人文研究』第130輯、2015年）pp.65-85を参照。

41）鈴木、前掲「G.ハウプトマン『ドイツ韻律による祝典劇』作品受容史（その１）」p.51.

42）Sprengel, Peter: Die inszenierte Nation: deutsche Festspiele 1813-1913, mit ausgewählten Texten, Tübingen 1991, S.81f.

43）「ハウプトマンは（『ドイツの韻律における祝祭劇』において）古代ギリシアのいわゆる「笑劇Mimus」という、古代の民衆的な劇の伝統を新たに活性化させようとした。」（A. a. O., S.78.）

44）Ziegler, Kornat: Gerhart Hauptmanns Festspiel als dichterische Tat, in: Breslauer Zeitung, 25.6.1913.

45）A. a. O.今日、『ドイツの韻律における祝祭劇』はほとんど上演されていない。しかしこれはハウプトマンの作品それ自体の質よりも、ドイツにおいて第一次世界大戦後「祝祭劇Festspiel」というジャンルそれ自体が廃れたことと関係付けられるかもしれない。

46）Wickert, Lothar: Konrat Ziegler, in: Gnomon: kritische Zeitschrift für die gesamte klassische Altertumswissenschaft, Bd.46, 1974, S.637.

クラーはゲーテが『ラオコーン』を読んで得た感動から説き起こしつつも、同書に現れたレッシングの「見方が時代遅れであること」[47]、「狭隘で、小市民的で、ほとんど素人的な（18－以下、引用文内のかっこは原則として引用者による）世紀の感覚が、レッシングによる芸術の意味と目的に関する言明一般の中にさらに宿命的に表れる」[48] ことを批判的に指摘している。

第一次世界大戦の後半、ツィークラーは主にソフィアのドイツ公使館において勤務した。この時期に生まれた考えをまとめて成立したのが、『ファウスト第二部への見解』である。『ファウスト第二部』においては、周知のように古代ギリシア神話に関するモチーフが重要な役割を演じる。同書は、同じ分野の研究と携わっていたツィークラーの関心を惹いたことが考えられる。彼は『ファウスト第二部への見解』の冒頭において、『ファウスト第二部』が『ファイスト第一部』をあらゆる意味において凌駕しているとする、老ゲーテの評価に疑義を唱える[49]。そしてかかる自己評価を吟味すべく、古典文献学における歴史学的－批判的な研究の発展を踏まえて、次のように考察することを断る。「我々古典文献学者は、過去二世代における偉大な指導者に導かれて、畏敬の念と批判を結び付けることを学んだ。我々は、最も偉大なもの、最も驚嘆に値するものでさえ、自らの時代、その時代の諸条件という限界、同時にまた自らの創造者の個性という限界によって制限され、局限されたものとして理解することを学んだ。」[50] こうしてツィークラーは、「最も偉大なもの、最も驚嘆に値するもの」たるゲーテの『ファウスト第二部』を対象として、自らの批判的な研究を行う。検討の結果ツィークラーは、「ゲーテが『ファウスト第二部』によって創造しようと企てた偉大で完結した古典的な作品は、彼にはもはや成功しなかった」[51] と結論する。その理由の一つとしてツィークラーは、『ファウスト第二部』の叙述の中に、ゲーテの実人生における政治的な革命家、改革者としての首尾一貫性の欠如、無力が表れていると考えている[52]。このようなツィークラーの『ファウスト第二部』観の中にカール・ローベルト・マンデルコヴ（Karl Robert Mandelkow）は、1918年の11月革命に続く「ヴィルヘルム帝政時代の古典崇拝に対する急進的な批判」[53] を見ている。

47）Ziegler, Konrat: Lessings Laokoon und die Schule, in: Neue Jahrbücher für das klassische Altertum, Bd.42, 1918, S.67.

48）A. a. O., S.74.

49）Ziegler, Konrat: Gedanken über Faust Ⅱ(1919), München 1972, S.4f.

50）A. a. O., S.2.

51）A. a. O., S.66f.

52）「40年前に農民の賦役の廃止を実現すべく自らのヘルツォーク（・アウグスト）の下で尽力した男（ゲーテ）が、1816年には（ドイツ統一）憲法の導入に反対した。こうした男が、どうして政治的な改革者ファウストの劇を描けるというのか？」（A. a. O., S.60.）

53）Mandelkow, Karl Robert: Stationen und Wandlungen des Goethebildes und des Goetheverständnisses im 20. Jahrhundert, in: Aktualität eines Unzeitgemäßen. Chemnitzer Goethe-Vorträge 1999, hrsg. v. Bernd Leistner, Chemnitz

ツィークラーによるハウプトマン、レッシング、ゲーテへの姿勢や見解の中には、一方で同時代の政治的な権威に対して距離を置く詩人への共感、他方ですでに認められた文学上の権威への（批判的な吟味を介した）挑戦、部分的にはツィークラーの政治観が表れていたと言える。

以上ⅠからⅥの分類に収まらないものの、ナチ政権成立以前のツィークラーによる重要な業績がある。それは、『ブレスラウ大学図書館に保存された、ラテン語の古典作品の目録』[54] という、ラテン語で記された著書である。

第二章においては、ツィークラーによるナチ政権成立以前の業績を検討してきた。彼による古典研究上の関心は、主に古典テキストの編集や伝承の問題に向けられていた。しかしそれに留まらず、古代ギリシア・ローマ、非ヨーロッパの諸民族の神話や宗教に対しても注がれていた。

第三章　ツィークラーによるナチズムとの関わり、それと彼の研究との関連

周知のようにナチ党は、ヴァイマル共和国の打倒を目指していた。ツィークラーがナチ政権の成立とほぼ同時に休職処分に遭い、グライフスヴァルト大学から解雇されたことは、彼がヴァイマル共和国の護持に力を尽くしたこと関わりがあった。したがって彼とナチズムとの関わりを検討する際、ヴァイマル共和国における彼の政治活動に遡って考察を行う必要がある。本章においては、1．ヴァイマル共和国におけるツィークラーの政治活動、2．ナチ政権下のツィークラー、3．ナチ政権下における彼の研究活動、それとナチズムとの関わり、という三つに分けて検討を行う。

1．ヴァイマル共和国におけるツィークラーの政治活動

第一章において記したように、彼は同共和国においてドイツ民主党、ドイツ国旗団、ドイツ平和協会、「反ユダヤ主義を防ぐ会」に加入するなど、大学外での政治活動に加わった（ツィークラーの事務机には1939年の逮捕の前まで、社会民主党の政治家でヴァイマル共和国の初代大統領を務めたフリードリヒ・エーベルト[Friedrich Ebert]の胸像が置いてあったという[55]）。これに留まらずツィークラーとナチズムとの関係を考える上で重要なのは、彼のグライフスヴァルト大学における大学行政者としての活動である。以下ヴァイマル共和国下のツィークラーによる、大学の内外における政治活動を検討してゆく。

2001, S.143.

54）Catalogus codicum latinorum classicorum qui in bibliotheca urbica Wratislaviensi compositus a Konrato Ziegler, Wlatislaviae 1915.

55）Kratz-Ritter, B. : a. a. O., S.187.

ツィークラーのグライフスヴァルト大学学長在任時の試みとして、以下の二点が特筆される。彼は平和主義者として、エーリヒ・マリア・レマルク（Erich Maria Remarque）『西部戦線異状なし』（1929年）を支援したことが推測されている[56]。同書は周知のように、第一次世界大戦の残酷さ、虚しさを一兵士の視点から描いた作品であった。またグライフスヴァルト大学から名誉博士号を演出家のラインハルトへ授与する提案を、1928年に行った[57]。彼はヴァイマル共和国を代表する演出家の一人となり、ハウプトマンの（『ドイツの韻律における祝祭劇』のみならず）戯曲の演出も数多く手がけていた。

グライフスヴァルト大学は、ヒトラーによってポンメルンのナチ党の拠点と見なされていた[58]。以下、ツィークラーがナチ党との対立に陥り、グライフスヴァルト大学の免職に至った背景として、二つの出来事を検討してゆく。

第一に、グライフスヴァルト大学における「国旗掲揚闘争」が挙げられる[59]。1924年グライフスヴァルトの労働組合と「戦争犠牲者の国際同盟」は、平和主義的な政治集会を同市の公会堂において行うことを企画した。その際フランスの作家アンリ・バルビュス[60]（Henri Barbusse）が同年８月４日、講演を行うことが予定されていた。しかしドイツでは前年のルール占領などによりフランスへの反感が高まっており、集会の反対派はこれを「フランス人の月曜日」と名付け、集会に反対するデモを行った（これにはナチスも加わっていた）。しかし警官隊の投入によって、デモは鎮圧された。その一週間後、グライフスヴァルト大学の前学長で当時、副学長を務めていた数学者テオドール・ファーレン（Theodor Vahlen）は、ヴァイマル共和国の（成立五周年の）建国記念日（８月11日）、大学本館の屋根にたなびくヴァイマル共和国の国旗を自らの手で降ろし、代わりに第二帝政の国旗であった「黒―白―赤」の旗を掲揚した[61]。これは、上で述べた警官隊の投入に抗議する意志表示であったとされている（ファーレンはナチ党員であり、1925年にはポンメルンにおける

56）Mensching, E.: a. a. O., S.19.

57）A. a. O.これは実現しなかった。

58）Inachin, Kyra T.: „Märtyrer mit einem kleinen Häuflein Getreuer“. Der erste Gauleiter der NADAP in Pommern Karl Theodor Vahlen, in: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte, Bd.49, 2001, S.36.

59）以下、Viehberg, Maud Antonia: Restriktionen gegen Greifswalder Hochschullehrer im Nationalsozialismus, in: Die Universität Greifswald und die deutsche Hochschullandschaft im 19. und 20. Jahrhundert, hrsg. v, Werner Buchholz, Stuttgart 2004, S.284-292. Eberle, Henrik: „Ein wertvolles Instrument“. Die Universität Greifswald im Nationalsozialismus, Köln/Weimar/Wien 2015, S.27-34によるところが大きい。

60）彼は『砲火』（1916年）において、フランス対ドイツの戦線における戦争の呵責ない、非英雄的な像を描いていた。バルビュスは実際グライフスヴァルトに来ることはなく、別のフランス人が講演に来た。

61）後半の「「黒―白―赤」の旗を掲揚した」というのは、共産主義系の『民衆の守り手』の報道による（Inachin, a. a. O., S.38）。

ナチ党[62] の大管区長となる)。ナチズムがヴァイマル共和国を批判する際、第二帝政の遺産を利用しようとしたことは、よく知られている。ファーレンはヴァイマル共和国の国旗を降ろした翌日、燃えるような演説を開き、フランスへの憎しみ、上述の政治集会を許可したヴァイマル共和国への抵抗を説いた。これは「憲法に忠実な高級官吏の同盟」および「グライフスヴァルト、その近隣の民主同盟」の批判を招き、文部省によるファーレンの停職処分に至った[63]。しかしツィークラーなどはファーレンと対立する立場であったものの、この停職処分を厳しすぎると見なし、ファーレンの復職へ向けて働きかけた。ツィークラーはグライフスヴァルト大学の学長に就任した後もファーレンの大学復帰に向けて尽力し、文部省などへの働きかけも辞さなかった。こうした一連の働きかけは、ファーレンの罷免によって地元のナチスや保守派に殉教者を作り出さないためであったともされている[64]。ツィークラーの骨折りは実を結び、ファーレンの大学生活への復帰を容易にした(ファーレンはナチ政権の成立後グライフスヴァルト大学へ戻り、後に同大学の名誉評議員となった。しかし彼は、同大学を解雇されたツィークラーによる復職の願いに応えなかった[65])。

ツィークラーはかつてハウプトマンを擁護する論陣を張ったように、(第二帝政の) 君主制あるいはヴィルヘルム主義の精神から、非常に強く距離を保っていた[66]。しかしツィークラーは「国旗掲揚闘争」を背景として1929年、(第二) 帝国建国式でのグライフスヴァルト大学学長演説において、ドイツ人がヴァイマル共和国において支持する政治体制の相違を超えて連帯すべく、次のように訴えた。

> 「私たちは今日、私たちを分かつものではなく、私たちを結び付け、私たちが一致するものを思い出すために、集まっているのです。(中略) というわけで、1871年の（第二）帝国建国を想起する日において、（第二帝国の国旗であった）黒－白―赤の旗は、過去の象徴として欠けることは許されません。この象徴を前にして、私たちは畏敬の念を抱いて敬意を表します。そして私たちは現在のドイツ人の共同体、つまりドイツの民族国家に、全力を挙げて喜んで仕える準備ができているので、同じ畏敬の念を抱いて現在の国家の象徴に挨拶します。私たちが生き、働きかけるこの（ヴァイマル）国家において、その象徴は黒－赤―金の旗です。私たちは、それら（二つの旗）が共に同じ理念、すなわちドイツ統一の象徴であることに思いを致そうで

62）当時はヒトラーがミュンヘン一揆に失敗しナチ党は禁止されたため、正しくは「国家社会主義自由運動Nationalsozialistische Freiheitspartei」と称した。

63）Viehberg, M.A.: a. a. O., S.285.

64）A. a. O., S.286.

65）A. a. O., S.291.

66）Mensching, E.: a. a. O., S.19.

はありませんか。」[67]

第二に、ナチ学生との対立が挙げられる[68]。1930年、グライフスヴァルト大学神学部の学生で「鉄兜団」[69]に所属していたアルフレート・ルッベ（Alfred Lubbe）は、教授も参加していた新入生の歓迎集会において、ヴァイマル共和国を挑発する文章を発表した[70]。これに対して同共和国支持派の学生は憤激し、その場にいたツィークラーも侮辱を感じた。ヴァイマル共和国支持派の学生はルッベの退学処分を大学へ要求した。大学側の処分が進まないのを前にして、彼らはルッベから私的な侮辱を受けたとして彼を起訴し、ツィークラーもこれに加わった。その結果、ルッベは執行猶予付きで一月の禁固と罰金刑を下された。その際ルッベを弁護しツィークラーを政治集会や新聞において批判したのが、（ファーレンの後にナチ党の）ポンメルン大管区長となったヴィルヘルム・カルペンシュタイン（Wilhelm Karpenstein）であった。カルペンシュタインは、次のように語っている。「グライフスヴァルトの全住民は、クリングミュラー[71]とツィークラーの中に「黒－赤―金（ヴァイマル共和国）」の世界観の代表者を見る。全住民は、新（しいナチ）国家がこの二人から解放されないことに納得しないだろう。」[72]「鉄兜団」や多くの学生はルッベの名誉棄損を理由に上の判決に抗議し、彼らの怒りは特にツィークラーへ向けられた。1932年夏学期にはナチスの突撃隊に使嗾

67）Ansprache des Rektors Professor Dr. Z i e g l e r bei der Reichsgründungsfeier der Universität Greifswald am 18. Januar 1929, in: Universitätsarchiv Greifswald, PA 196, Bd.4, S.3.この演説に先立って、ツィークラーは1928年に行ったグライフスヴァルト大学学長演説『トゥキュディデスと世界史』の中で、次のように述べていた。「しかしギリシア全体の運命を考察する人にとって、特にペロポネソス戦争によって描かれた危機を考察する人にとって、この運命と近代ヨーロッパとの類似を過小評価することはできません。（中略）ギリシア文化は没落しました。というのも、彼ら（ギリシア人）は彼らを結び付けた偉大で共通な絆のため、彼らを分かつより小さな事柄を無視できなかったからです。ヨーロッパは全世界のより広い地域で、古代「世界」におけるかつての小さな全ギリシアと同じ役割を占め、（内戦による消耗という）破滅に至る最初の一歩を、（第一次世界大戦によってギリシアと）同様に踏み出しました。ヨーロッパがこうした道をさらに歩むのか否か、あるいは自省し、より幸せで自由な運命を創造するのか否か。これは未来へ向けた問いであり、人間の予見は答えることができません。」（Ziegler, Konrat: Thukydides und die Weltgeschichte, Greifswald 1928, S.21.）ここでツィークラーはペロポネソス戦争の史実を鏡に、ヨーロッパ諸国の対立ではなく連帯を訴えている。こうした見解は（第二）帝国建国式での学長演説に現れた、ドイツの分断よりも統一を重視する彼の立場に反映したと思われる。

68）以下、Viehberg, M.A.: a. a. O., S.286-291, Eberle, H.: a. a. O., S.44-47によるところが大きい。

69）ヴァイマル共和国における民主主義に敵対的な、在郷軍人の集団。

70）Viehberg, M.A. : a. a. O., S.286f.

71）Fritz Klingmüller. グライフスヴァルト大学法学部教授。ツィークラーと並んで、ナチ学生の批判に曝された。

72）A. a. O., S.291.

された、ツィークラーに対する学生のデモが行われ、警官隊の介入によって鎮めることができた。大学はこの介入に抗議し、学生の多数派に同情的であった[73]。ツィークラーは学内で孤立した。その後、紆余曲折を経て、ツィークラーはルッベへの起訴を取り下げざるを得なくなった。これと関連して、ツィークラーが地元誌への記事の発表によってギムナジウムの人事に政党政治的な立場から介入しようとしていたことが、問題視された[74]。

こうしてツィークラーは複雑なキャンペーンの犠牲者になり[75]、ナチ政権の成立によって解雇に至った。ツィークラーがグライフスヴァルト大学から解職された直接の切っ掛けとしては、カルペンシュタインの差し金が推測されている[76]。

2．ナチ政権下のツィークラー

1933年９月、彼はグライフスヴァルト大学から正式に解雇され、大学の教員宿舎に住むことができなくなった。そこで家族と共にベルリンへ転居した。エッカルト・メンシング（Eckart Mensching）はツィークラーがベルリンへ転居した理由として、当地が第三帝国の首都であるにもかかわらず400万人都市であり、人に知られず多くの（反体制的な）似た意見の持ち主と出会えること、（在野の学者として研究を継続するため）公共図書館を利用できた点などを挙げている[77]。

ツィークラーは大学を解雇されたものの、著作の発表は許された。彼と関わりのある知人、友人、出版社が、ツィークラーに研究を発表する場や仕事を提供した。こうして彼はベルリンにおいて、研究を孜々として続けることができた。ベルリン時代のツィークラーの状況については、よく知られていない。しかし彼と同様、大学を解雇された医学史家ヴェルナー・ライプブランド（Werner Leibbrand）の筆を通して、ツィークラーはベルリンにおいて「ギリシア研究会」という読書会に加わっていたことが伝えられている[78]。この研究会のメンバーは入れ替わりがあったものの、古典文献学者のヴァルター・クランツ（Walther Kranz）、フェリックス・ヤーコビー（Felix Jacoby）、パウル・フリートレンダー（Paul Friedländer）、近代史家のハンス・ロートフェルス（Hans Rothfels）などであった。彼らの多くはツィークラーと同様、ナチ政権から公職を解かれた者であり、同

73）Klän, Werner: Die Evangelische Kirche Pommerns in Republik und Diktatur. Geschichte und Gestaltung einer preußischen Kirchenprovinz, 1914-1945, Köln 1995, S.130.

74）Viehberg, M.A. : a. a. O., S.290.

75）A. a. O., S.291.

76）Inachin, K.: a. a. O., S.50.

77）Mensching, E. : a. a. O., S.6, 37.

78）Kudlien, Fridolf: Werner Leibbrand als Zeitzeuge: Ein ärztlicher Gegner des Nationalsozialismus im Dritten Reich, in: Medizinhistorisches Journal, Bd.21, 1986, S.341f.

研究会には「カタコンベのような雰囲気が支配していた」[79]という。この研究会においては、アリストテレス『形而上学』をギリシア語の原文で、注釈を参考にして読んだという[80]。

ツィークラーはベルリンで年金生活者となり、収入が手取りで以前の約半額に減る中、七人の家族を養わなければならなかった。そこで彼は、知人であるユダヤ系の弁護士兼銀行家の息子の家庭教師となった。この知人は1938年の「水晶の夜」の後、家族と共にドイツを脱出することを決意した。ツィークラーは彼を援けることを約束し、1938年にイギリスへ旅行した際にはイギリスの高名な古典文献学者ギルバート・マレー（Gilbert Murray）と面会し、知人を援けるよう頼んだという。この知人は脱出先へ持参する財産として、150万ライヒスマルク（現在のレートで約６億円）の中から20万ライヒスマルク（同上、約8000万円）を宝石に換えることができた。この知人はイギリスへの脱出に成功したが、ツィークラーも関わった宝石、現金の持ち出しは成功しなかった。この知人の別の協力者がオランダとの国境で捕まり、ツィークラーも共犯者として逮捕された。彼は裁判にかけられたが、「被告（ツィークラー）の態度は、並外れた助けへの準備と結び付いた、世俗への途方もない疎さからのみ説明できる」[81]とされた。さらに「被告は４人の子供の父として経済的に恵まれた状況になかったにもかかわらず、無私の仕方で常に他人に肩入れし、彼らを助言と行為によって援けた」[82]ことが顧慮され、１年半の禁固、２万ライヒスマルク（同上、約800万円）の罰金の判決を下された。しかし恩赦のため罰金は免除され、この禁錮期間から勾留期間を差し引いた４ヵ月の入獄を課せられた。これは当時の状況においては、きわめて寛大な判決であった。ツィークラーは出獄後、当局から絶対的な出版禁止令を下された[83]（その後ツィークラーは、彼が国外逃亡を助けたユダヤ系の知人から、何ら消息を聞かなかったという[84]）。その他にもツィークラーは知人の夫婦（妻はユダヤ系の女性）と共に旅行を行ったり、自殺を遂げたユダヤ系の知人の娘を繰り返し受け入れるなどした[85]。

1943年11月の空襲で自宅が全焼した後、ツィークラーは姉が住んでいたハルツのオステローデへ、家族と共に移住した。当地の高等学校で教鞭を執っていた古典語教師の蔵書の助けなどを借りて、ツィークラーは研究を続行した。この頃「戦争終結前の最後の数ヵ月の緊張した雰囲気の中で、

79）A. a. O., S.341.

80）A. a. O.

81）Mensching, E. : a. a. O., S.27.

82）A. a. O., S.28.

83）A. a. O., S.22.

84）A. a. O., S.44.

85）Kratz-Ritter, B. : a. a. O., S.189.

厳罰を下されるのを覚悟の上で」[86]、グライフスヴァルト大学での元同僚でゲッティンゲン大学を解雇されていたユダヤ系の古典文献学者クルト・ラッテ(Kurt Latte)を自宅に一時期、匿った。こうして彼による困窮した（特にユダヤ系の）隣人への助力は、一過的な同情ではなかったことがわかる。

3．ナチ政権下におけるツィークラーの研究活動、それとナチズムとの関わり

ナチ政権下におけるツィークラーの研究は、以前の研究上の関心をおおむね引き継ぐものであった。以下、第二章で分類した五つのグループに定位して、この時期の彼の著作を検討してゆく。

Ⅰ．古代ギリシア・ローマの神話や宗教に関する研究

ツィークラーはロッシャーから引き継いだ『ギリシア・ローマ神話に関する詳細な事典』の第5巻、第6巻を刊行し、同事典を完結させた。ツィークラーがナチ政権下『パウリー百科事典』のために発表した項目の中には、古代ギリシア・ローマの神話や宗教に関する項目が含まれている。

Ⅱ．プルタルコスに関する研究、彼のテキストの批判的な校訂

ツィークラーは引き続きナチ政権下、「プルタルコス研究」を7回、12の章に分けて『古典文献学のためのライン博物館』に発表している（1938年まで）。その内容は、主に『対比列伝』の中で扱われた人物に定位した、テキストの様々な箇所の異同、同書の写本の歴史を検討したものである。リンスコックとの共同作業による『対比列伝』の批判的校訂版は、ナチ政権下、第4分冊から第6分冊までが刊行され、1939年に完結した。「プルタルコス研究」は、『対比列伝』の批判的な校訂の副産物や補足として生まれ、批判的な校訂を経た版の信頼性を高めるに役立った。

Ⅲ．キケロに関する研究、彼のテキストの批判的な校訂

これに関する研究はナチ政権下、行われていない。しかしツィークラーは1934年、「第三の人文主義」の影響下にあった雑誌『古代』に、「教養人は政治家たり得るか？」という題名の下に、キケロのテキスト[87]の翻訳を発表している。この翻訳の中には、「しかし（政治に携わることを諫める人々の考えでは－原注）気の狂った男（マルクス・カトー）は、困窮に強いられたわけではない

86）Szabo, Anikó: Vertreibung, Rückkehr, Wiedergutmachung: Göttinger Hochschullehrer im Schatten des Nationalsozialismus: mit einer biographischen Dokumentation der entlassenen und verfolgten Hochschullehrer, Göttingen 2000, S.114.

87）キケロ『国家論』第1巻第1章第1節から第8節の途中まで。

のにもかかわらずきわめて高齢に至るまで、休息と閑暇の中で快適な生活を送る代わりに、政治の荒波と取り組むことを好む」[88]、「しかし彼ら（政治に携わることを諫める人々）はこうした（不名誉な死への恐れという）点で、最も有名な男たちの破局、こうした男たちに恩知らずの同胞から示された多くの不正を数え立てる場合、最も強力な切り札を出すことができると信じる」[89]など、ツィークラーの過去と未来を彷彿させる文章が見い出せる。

Ⅳ.『パウリー百科事典』の項目執筆

ツィークラーは同事典に関して、1933年から1942年にかけて115の項目を執筆している。その中には、「悲劇 Tragoedia」[90]「ピネウス Phineus」[91]「フォティオス Photios」[92]「オルフェウス Orpheus」[93]など、独立した論文ないしは単著に値する分量の多い項目も含まれている。当時『パウリー百科事典』の刊行を推し進めた編集責任者のクロルとミッテルハウスは、ベルリンでのツィークラー家の経済的な困窮を援けるため、ツィークラーに『パウリー百科事典』の多くの項目の執筆を依頼した[94]。

Ⅴ. ヘレニズムの文学・思想に関する研究

1913年にカリマコスに関する論文を発表して以来、ツィークラーによるヘレニズムの文学・思想への関心はしばらく途絶えていた。しかしナチ政権が生まれる直前、同政権下にこれへの関心が復活し、彼は『ヘレニズムの叙事詩』(1934年)、「ルクレティウスの死」(1936年)、「カリマコスと女性たち」(1937年) などの著作を発表している[95]。『ヘレニズムの叙事詩』においてツィークラーは、ホメロスに対抗して叙事詩を創作したカリマコスの再評価を試みている。「ルクレティウスの死」においては、彼の死をめぐる伝承を批判的に吟味している。すなわちルクレティウスは媚薬を飲んだ後に気が狂い、自殺したと言われてきた。ツィークラーはこの伝承の成立の経緯を考察し、かかる伝承がヒエロニムス（Hieronymus）などによるキリスト教の護教的な関心から捏造された、と主

88）M. Tullius Cicero: Kann ein gebildeter Mensch Politiker sein?, übersetzt von Konrat Ziegler, in: Die Antike. Zeitschrift für Kunst und Kultur des Klassischen Altertums, Berlin/Leipzig, Bd.10, 1934, S.306.

89）A. a. O., S.308.

90）Ziegler, Konrat: Tragoedia, in: RE, a. a. O. Zweiter Reihe, 12.Halbband, Stuttgart 1937, S.1899-2075.

91）アルゴー船の英雄伝説に登場する盲目の予言者など。Ziegler, Konrat: Phineus 1-3, in: RE, a. a. O., Erster Reihe, 39. Halbband, Stuttgart 1941, S.215-248.

92）９世紀、東ローマ帝国の有名な総主教。Ziegler, Konrat: Photios 13, in: a. a. O., S.667-737.

93）Ziegler, Konrat: Orpheus, in: a. a. O., 35.Halbband, 1939, S.1200-1316, 1318.

94）Mensching, E.: a. a. O., S.21.

95）ルクレティウスはローマ共和制期の思想家だが、ヘレニズム期の思想家エピクロスの影響が濃かったため、ヘレニズムの思想・文学に含めておく。

張している[96]。ツィークラーによるこのルクレティウス論は、大きな反響を呼んだという[97]。ツィークラーは「カリマコスと女性たち」において、ヘレニズムの文芸に少年愛の理想が継承されたことに注目した。そして「女性と愛への自らの関わりにおいて、カリマコスは生粋のヘレニズム風の恋愛主義者ではなく、古典的な特徴を備え遅れてやって来たドーリア（スパルタの古名）の貴族主義者であった」[98] と結論している。

ベルリンからオステローデへ移った後も、ツィークラーは社会的に不遇な状況の下で研究を継続した。ハンス・ゲルトナー（Hans Gärtner）によれば、当時のツィークラーによる研究への没頭は、（ナチ政権下の）あらゆる暴力に逆らって自らを支えた最も重要な戦略であったという。「時折の気分の変化にもかかわらず学問的な作業に首尾一貫して打ち込むことは、何よりも生き甲斐という特質を備えることができた。この生き甲斐という原理は、あの支離滅裂になった（ナチ政権下の）時代にあって逆境、危険、屈辱に勇敢に立ち向かい、自らのアイデンティティーと品位の少なくとも一部を主張することを可能にした。」[99]

引き続き、ナチ政権下におけるツィークラーの研究活動とナチズムとの関わりについて、検討を行う。Ⅱ．プルタルコスに関する研究、について注目に値するのは、『対比列伝』に登場するスパルタ人（リュクルゴス、リュサンドロス、アゲシラオス、アギスとクレオメネス）が、「プルタルコス研究」において一人も取り上げられていないことである。これは、スパルタを主に模範として仰いだ[100] 第三帝国から、ツィークラーが距離を置こうとしたためではないか。Ⅲ．キケロに関する研究、については、すでに言及した「教養人は政治家たり得るか？」の結びに、ツィークラーによるナチ政権への当てこすりと思われる、彼自身の文章がある。

「こうした野蛮な現在にあって、政治的な戦いは傍若無人な野卑と粗野な暴力へと退化した。かかる現在にあって、繊細な教養、趣味、理想への意欲を備える洗練された精神は、そもそも政治家たり得るのか？　こうした点においても、かかるテーマについてギリシアの先行者に

96）Ziegler, Konrat: Der Tod des Lucretius, in: Hermes, a. a. O., Bd.74, 1936, S.436-439.

97）Mensching, E.: a, a. O., S.21.

98）Ziegler, Konrat: Kallimachos und die Frauen, in: Die Antike, a. a. O., Bd.13, 1937, S.42.

99）Gärtner, Hans: „Allen Gewalten zum Trotz sich erhalten!“ Unpublizierte Briefe Kurt Lattes aus den Jahren 1943-1946, in: Göttinger Forum für Altertumswissenschaft, Bd.5, 2002, S.203.

100）拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（一）」（東洋大学経済研究会『経済論集』第43巻 2 号，2018年）pp.199-224、拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（二）」（同上、第44巻 1 号，2018年）pp.1-30を参照。

よって行われた議論に知悉していたキケロは、自らの経験から語り、個人的な表現によって次のように答えるであろう。然り、三回然りと[101]」。

この文章は、ナチ政権への抵抗をドイツの教養人に暗に呼びかけているように読める[102]。Ⅳ.『パウリー百科事典』について、ナチ政権下に刊行された巻の中には、ナチズムへ迎合する記述の含まれた項目が存在する[103]。これとは対照的にツィークラーが当時、執筆した項目の中には、ナチズムへの距離と解釈できる記述が一部、認められる[104]。Ⅴ．ヘレニズムの文学・思想への関心も、ナチズム寄りのギリシア・ローマ古典古代の受容への距離として解釈できる。なぜならヘレニズムはナチズムの歴史観において、人種の混合が進み（ギリシアの）民族性が失われユダヤ人が活躍した世界市民主義の時期として、一般に低く評価されたからである[105]。これに対してツィークラーは、カリマコスに表れたアレクサンドリア主義を「高度に展開した閉じられた社会において、成熟や爛熟のある段階で展開するのが常であるような」[106]ものとして評価している。「カリマコスと女性たち」における、カリマコスがスパルタ的な特徴を備えていたとの指摘は、ヘレニズムを蔑みスパルタを高く評価したナチズムにとって、都合の悪い考えであったろう。「ルクレティウスの死」における（彼に関する伝承を捏造した）キリスト教の教父に対する批判は、ナチズムに対する批判の隠れ蓑であった可能性がある[107]。

---

101) M. T. Cicero: Kann ein gebildeter Mensch Politiker sein?, a. a. O., S.314f.

102) ナチ政権下、ツィークラーにかかる文章を掲載する機会を設けたイェーガーに、メンシングは「市民としてのかなりの勇気」（Mensching, E.: a. a. O., S.42）を認めている。

103) 例えばアッティカの「「監督官Epheben」とその指導者は一種の（ナチスの）“親衛隊”」（Hommel, Hildebrecht: Peripoloi, in: RE, a. a. O., 37.Halbband, 1937, S.855）に譬えられ、アテナイの僭主ペイシストラトスはヒトラーの姿と暗に重ねられている（Schachermeyr, Fritz: Peisistratos, in: RE, a. a. O., S.160）。

104) ニーチェは『音楽の精神からの悲劇の誕生』において独自の古代ギリシア悲劇解釈を開陳し、彼はナチスによってナチズムの先駆者と見なされた。『パウリー百科事典』中の先に触れた「悲劇」の項目（注90を参照）において、ツィークラーはニーチェの古代ギリシア悲劇観に全く言及していない。またツィークラーは、平和なイメージの強いオルフェウスとスパルタとの関連について詳しく紹介している（Ziegler, K.: Orpheus, a. a. O., S.1241f.）。

105) Gehl, Walther: Geschichte. 6.Klasse Oberschulen, Gymnasien und Oberschulen in Aufbauform. Von der Urzeit bis zum Ende der Hohenstaufen, Breslau 1940, S.68-71.

106) Ziegler, K.: Kallimachos und die Frauen, a. a. O., S.6.

107) ナチ政権下、キリスト教の護教家（カトリックの大審問官、プロテスタントの宗教改革者など）に対する批判に仮託して全体主義的なナチズムを批判する手法が、散見された（例えば前者についてはAndres, Stefan: El Greco malt den Großinquisitor [1936]、後者についてはZweig, Stefan: Castellio gegen Calvin [1936]を参照）。ナチズムは半ば公然とキリスト教を敵視していたため、かかる批判を禁止できなかった。

その他、注目に値するのは、カリマコスとの関連の下に著された「クレタ人エケマス」(1938年)という小論である。ツィークラーは、ヘレニズムにおいて獣への感情と獣の尊重が人間的・倫理的・自然法的な考察の区域へ転移され、さらにこの区域が「人間愛φιλανθρωπία」という言葉と概念によって書き換えられたことを特筆している。その際この「人間愛」の中に、獣の心に関する問いと多く携わったプルタルコスによる世界観、人生観の中心概念を求めている[108]。この小論を発表した1938年ツィークラーは折しも人間愛から、知人のユダヤ系銀行家を援けるのに奔走していた。

第四章　第二次世界大戦後におけるツィークラーの活動、それとナチズムとの関連

ツィークラーは第二次世界大戦の終結を、オステローデにおいて迎えた。同大戦後の彼の活動はヴァイマル共和国期と同様、政治と研究を両輪として展開してゆく。以下この時期のツィークラーを、１．政治活動、２．研究活動に分け、ナチズムとの関わりが認められる場合はそれに言及しつつ、考察してゆく。

１．政治活動[109]

ツィークラーは1947年、旧ドイツ民主党の党員の多くが第二次世界大戦後、自由民主党（FDP）へ入党したのに対して、社会民主党（SDP）へ入党した。そして社会民主党の推薦を受け、ゲッティンゲンの市会議員を1948年から1964年まで務め、「赤いツィークラー」[110] として知られた。この職に就いていた間、彼は当時のドイツ連邦共和国における復古主義的な風潮に抗った。それを表すのは、映画「夜と霧」(1956年）の上映会をゲッティンゲン市が催すべきことを1957年、主張したことである[111]（この提案は受け入れられなかった)。「夜と霧」は、アウシュヴィッツ強制収容所を描いたフランス映画であった。ツィークラーは1945年「キリスト教とユダヤ教の共同作業のための協会」に入会し執行部を務め、キリスト教徒とユダヤ教徒の和解のために尽力した。ここには、ヴァイマル共和国期「反ユダヤ主義を防ぐ会」において活動した彼の姿との連続が窺える。ツィークラーはその後、社会民主党に不満を抱き、東西冷戦下ドイツの中立を唱えたドイツ平和同盟（DFU）[112]

108) Ziegler, Konrat: Der Kreter Echemmas, in: Rheinisches Museum für Klassische Philologie, Bd.87, 1938, S.78.

109) 以下の記述は、主にMensching, E.: a. a. O., S.29-34による。

110) Kratz-Ritter, B. : a. a. O., S.191.

111) Kratz-Ritter, B. : a. a. O., S.194.上映の理由付けは、以下のとおりであった。「多くの人々、特に若い世代は、1933年から1945年に至るまでドイツ民族の名の下に犯された非人間的な出来事の規模を知らない。17歳と18歳の生徒、さらに年輩の市民には、今日なお重荷となっている過去の（アウシュヴィッツ強制収容所という）こうした面と取り組む機会が、与えられるべきである」（A. a. O.）

112) Mensching, E.: a. a. O., S.33f., 46.

に1965年、入党した。この同盟を、「社会民主党が変節した後、第三次世界大戦への道を歩まない唯一の政党である」[113] と判断したためである。ここに、平和主義者としてのツィークラーの姿が躍如としている。1964年にはドイツ連邦共和国政府より、連邦功労十字章の叙勲の申し出があった。しかし、これを辞退した。その理由は、「握手したくない政治家（ハンス・グロプケ [Hans Globke]）が、同じ勲章をもらったから」[114] である。グロプケは周知のようにナチ政権下ニュルンベルク人種法の注釈を著す作業に加わり、アデナウアー政権で官房長官を務めていた。こうしてツィークラーは、ナチズムの過去を忘却しようとする1950年代から1960年代にかけてのドイツ連邦共和国の風潮に対して、抵抗の姿勢を崩さなかった。

ここで第二次世界大戦後における、ツィークラーとラッテの確執に触れねばならない。両者の関わりは人間的な感情の行き違いに由るのみならず、その関わりはドイツの人文主義における二つの潮流の関わりを体現していると思われるからである。第一章において述べたように、ツィークラーは第二次世界大戦中ラッテを援けた。にもかかわらずラッテは同大戦後ゲッティンゲン大学によるツィークラーの客員教授任命へ向けた照会に対して、ツィークラーの学者としての業績を控え目に述べ、ツィークラーのゲッティンゲン大学への赴任に尽力しなかった[115]。ツィークラーはその経緯について、次のように述べている。

> 「（ラッテによれば）あらゆる個人的な顧慮を度外視し（つまりツィークラーのゲッティンゲン大学への赴任に尽くさず）、純粋に事柄に即した考慮によって、学問的に最善の男を推薦することが彼に課された義務である、という。ゲッティンゲンが植民地大学のレベルへ引き下げられるのを防ぐため、全力を尽くさなければならない、という。（中略）ラッテは自らの立場を説明するため、付け加えた。彼はゲッティンゲンで、政治的な危険に曝された次のような男のために尽くした（私［ツィークラー］は、その名前を伏す—原注）。この男がナチスの大物で、反ユダヤ主義者であったにもかかわらず。なぜならこの男は、学科で最善の（能力を備え

113) Wickert, L.: a.a.O., S.638.

114) A. a. O.グロプケは1963年、ドイツ連邦共和国政府から大十字功労勲章を授かった。

115) なぜラッテがツィークラーの学者としての業績を不十分と見なしたのか、推測による他ない。しかしそれは、ツィークラーの主要な業績が（論文や単著ではなく）事典の項目の執筆、編集にあったためらしい（Mensching, E.: a. a. O., S.21. s.Wegeler, Cornelia: „...wir sagen ab der internationalen Gelehrtenrepublik". Altertumswissenschaft und Nationalsozialismus. Das Göttinger Institut für Altertumskunde 1921-1962, Wien/Köln/Weimar 1996, S.526.）第二次世界大戦後のドイツ語圏の古典文献学界は、おおむねラッテの見解に与したように見える。ツィークラーは、ドイツ語圏のアカデミーの会員に招致されていない。

る）人間であったので。」[116]

こうしたラッテの言明から、（反ユダヤ主義を奉じる学者を私的な観点を交えることなく評価する）彼の学者としての真理愛を買うべきなのか、ツィークラーに対する人間としての忘恩を非難すべきなのか、評価が分かれるところである。ラッテがツィークラーに対してこのような冷たい態度を取った理由として、ラッテはツィークラーよりも政治的にはるかに右に位置していたこと[117]、ラッテはツィークラーにグライフスヴァルト時代から深い反感を抱いていたこと[118] などが指摘されている。ヴィッケルトによれば、ラッテの振る舞いはツィークラーにとって「決して克服することのなかった、人間的な失望であった」[119] という。

人文主義の要となるラテン語の「人間性humanitas」は、2世紀に古代ギリシア語の「教育・教養・文化（パイデイア）」と「人間愛（フィラントロービア）」の融合からなった[120]。その後ドイツの人文主義においては、伝統的に「教育・教養・文化（パイデイア）」が「人間愛（フィラントロービア）」よりも重視されてきた（18世紀末期の新人文主義は、「汎愛主義Philanthropi[ni]smus」を対抗思潮の一つとした）。20世紀の「第三の人文主義」も、イェーガーの主著『パイデイア　ギリシアにおける人間形成』[121] が示すように、こうした評価を踏襲した。ラッテも、「教育・教養・文化（パイデイア）」の重視を体現している。かかる支配的な人文主義の理解に対してツィークラーは、『パウリー百科事典』の項目執筆、『ギリシア・ローマ神話に関する詳細な事典』の編集に現れたように「教育・教養・文化（パイデイア）」を重んじるのみならず、「人間愛（フィラントロービア）」を実践したのであった。

2．研究活動

引き続き第二次世界大戦後のツィークラーによる研究活動を、以前の研究分野との関連から検討してゆく。

Ⅰ．古代ギリシア・ローマの神話や宗教に関する研究

彼は、教授資格請求論文において取り組んだマテルヌス『異教の誤りについて』の批判的な校訂

116) Szabo, A. : a. a. O., S.116.

117) Mensching, E.: a. a. O., S.42.

118) Classen, Carl Joachim: Kurt Latte, Professor der Klassischen Philologie 1931-1935, 1945-1957, in: Die Klassische Altertumswissenschaft an der Georg-August-Universität Göttingen. Eine Ringvorlesung zu ihrer Geschichte, hrsg. v. Carl Joachim Classen, Göttingen 1989, S.210.

119) Wickert, L.: a. a. O., S.638.

120) ゲッリウス『アッティカの夜』第13巻17章を参照。

121) Jaeger, Werner.: Paideia. Die Formung des griechischen Menschen (1934), Berlin/Leipzig ^{2}1936, S.13f.

を経た版を再版し[122]、同書のドイツ語訳[123]を1953年に刊行している。ツィークラーは1942年『パウリー百科事典』において、ギリシア神話に登場する吟遊詩人オルフェウスに関する長文の項目記事を発表していた[124]。1950年にはオルフェウスの受容について、「ルネサンスと近代におけるオルフェウス」という論文を刊行している。ツィークラーはこの論文において、オルフェウス崇拝におけるキリスト教と異教の混淆、オルフェウスがバレーやオペラの中で描かれたあり方などを検討している。そしてオルフェウスが「ふらつく恍惚を掻き立てる者ではなく、あらゆる粗野なもの、無秩序なものを常に和らげ、平和をもたらし、宥める者であった」[125]という側面を特筆している。平和主義を奉じたツィークラーはこの引用においてオルフェウスに親しみを感じ、ナチズムを思わせる「粗野なもの、無秩序なもの」を醇化する役割をオルフェウスの中に見出していたかのようである。

Ⅱ．プルタルコスに関する研究、彼のテキストの批判的な校訂、翻訳

ツィークラーはナチ政権下、プルタルコスに関する先行研究、自らの研究をまとめる作業と取り組んでいた。その集大成が、『カイロネイアのプルタルコス』（1949年）である（これは、その翌年に『パウリー百科事典』に収録されたプルタルコスに関する項目記事[126]と同一である）。ツィークラーは本書において、プルタルコスが精神においても性格においても決して独創的な思想家ではなく、思考の鋭さやエネルギー、精神的な創造力が欠けていたことを認める[127]。しかし「我々は決定的なことに、プルタルコスを人間愛、人間知、倫理的な理想主義を豊かに備えた純粋で、暖かい人間として高く評価できる」[128]という。彼の人間愛（フィラントロービア）は、キリスト教の隣人愛とほとんど区別できないか、全く区別できないという[129]。リンスコックとの共同作業による『対比列伝』の批判的校訂版は第二次世界大戦後、全ての巻が再版され、四版が出版されたものもあった。さらにプルタルコスの『道徳論集』第６巻、『音楽論』の批判的校訂版も出版された（1953年）。1967年には、ツィー

---

122) Iulius Firmicus Maternus. De errore profanarum religionum mit Einleitung und kritischem Apparat, hrsg. v. Konrat Ziegler, München 1953.

123) Iulius Firmicus Maternus: Vom Irrtum der heidnischen Religionen, übertragen und erläutert von Konrat Ziegler, München 1953.

124) 注93を参照。

125) Ziegler, Konrat: Orpheus in Renaissance und Neuzeit, in: Form und Inhalt. Kunstgeschichtliche Studien. Otto Schmitt zu 60. Geburtstag am 13. Dezember 1950, Stuttgart 1950, S.256.

126) 注145を参照。

127) Ziegler, Konrat: Plutarchos von Chaironeia, Stuttgart-Waldsee 1949, S.301.

128) A. a. O.

129) A. a. O., S.306.

クラーによる最後の「プルタルコス研究」が刊行されている[130]。注目に値するのは第二次世界大戦後、ツィークラーによる『対比列伝』全巻、『道徳論集』からの抜粋（『神、摂理、神霊、占いについて』[131] というタイトル）のドイツ語訳が刊行されたことである（1952年から1965年）。彼は、古典テキストのドイツ語への信頼できる翻訳は、古代学とその対象がますます孤立し、歪んで描かれることに対抗すべきである、と考えていた[132]。ツィークラーが解説を付した、プルタルコスの作品の選集も刊行された[133]（1957年）。

「ヨーロッパ世界におけるプルタルコス」（1950年）において、ツィークラーは自らがプルタルコスのエッセンスと見なすものを述べている。本論においてツィークラーは、ドイツの新人文主義以降「前５世紀、前４世紀の偉大な詩人や作家と比べて、（中略）ヘレニズムや、それどころかローマ帝政期の作家は、劣った模倣者や亜流として過小評価され始めた」[134] ことを指摘する。しかし彼はこうした評価に異を唱え、４世紀に至るまでプルタルコスの作品が多く読まれたこと、プルタルコスの作品が15世紀に再発見された後、エラスムス、メランヒトンなど著名な人文主義者に称賛されたこと、フランスの古典主義，モンテスキュー、ルソー、シェークスピアなどに大きな影響を与えたことを強調する。そしてプルタルコスの魅力を、次のように要約する。

> 「しかしそれ（英雄の生涯の模範的な創造者であること）以上に、（プルタルコスによる）民主主義的な自由、僭主や独裁者に対する反抗、社会的な慈悲の精神は、啓蒙、人間性、精神的な革命化の（18）世紀――そこから政治革命が育ったのだが――を魅惑し、感激させた。こうした精神はプルタルコスの著した幾つかの伝記から――全ての伝記からというわけでは全くないが！――、読者に語りかける。というわけで、自らの気分と志操が表現されているのを見出した（プルタルコスの）作品が手に取られた。しかし他方でプルタルコスは、モラリスト、人間愛と人間の尊厳へ暖かい心を抱く、魅力的な説教者にして予言者であった。時代のスローガンである人間愛（フィラントロービア）とは、特にプルタルコスから時代に近付いてきたのではなかろうか。彼の最も愛好する言葉、同時に彼の本質を最も特徴付ける表現は、まさにこの「人間愛φιλανθρωπία」

130) Ziegler, Konrat: Plutarchstudien. XXII. Drei Gedichte bei Plutarch, in: Rheinisches Museum für Klassische Philologie, Bd.110, 1967, S.53-64.

131) Plutarch: Über Gott und Vorsehung, Dämonen und Weissagung, eingeleitet und neu übertragen von Konrat Ziegler, Zürich/Stuttgart 1952.

132) Gärtner, H.: Konrat Ziegler, a. a. O., S.X.

133) Plutarch. Auswahl und Einleitung von K. Ziegler, Frankfurt am Main/Hamburg 1957.

134) Ziegler, Konrat: Plutarch in der abendländischen Welt. Vortrag, gehalten auf dem 1. Berliner Altphilologenkongreß am 30.8.1951, in: Gymnasium. Zeitschrift für Kultur der Antike und humanistische Bildung, Jg.59, 1952, S.21.

に他ならない。」[135]

上の引用においてツィークラーは、「クレタ人エケマス」（1938年）に表れたプルタルコス観[136]を敷衍している。かかる人間愛の評価は、「人間性に対する犯罪」に組織的に手を染めたナチズムの対極に位置した。「ツィークラーによるプルタルコスとの生涯にわたる関わりも偶然の産物ではなく、おそらく内的な親縁性に基づいていた」[137]ことが指摘されている。プルタルコスは（ギリシア風の文化という意味での）ヘレニズムを代表する文人の一人として、ギリシアとローマを一視同仁に考察しただけではない。彼の心は、非ギリシア・ローマの神々、文化・文明にも開かれていた[138]。これと関連してツィークラーは、『ドイツにおけるヘレニズム研究』に関する書評を著し、「ストア派においてギリシア的なものとセム的なものを分ける（マックス・ポーレンツ[Max Pohlenz]の）試みに（ヴォルフガング・シュミート[Wolfgang Schmid]が）懐疑的である」[139]ことを特筆している。

Ⅲ．キケロに関する研究、彼のテキストの批判的な校訂、翻訳

ツィークラーは、キケロによる「アンニオ・ミロン弁護」[140]（1949年）、『法律論』[141]（1950年。1963年に再刊）の批判的な校訂版を出版している。後者との関連から、1953年には「キケロ『法律論』のテキストの形態について」[142]を発表している。プルタルコスの場合と同様、ツィークラーは第二次世界大戦後、古典テキストの原典からの翻訳と携わり、1974年には『国制論集』の名の下に、キケロによる『国家論』『法律論』のドイツ語訳を刊行している[143]。

135）A. a. O., S.28.「『対比列伝』に表れたphilanthropiaの意味は簡単に言えば、特に文明化され、教養ある人の徳である。それは、愛想の良さ、親切、気前の良さ、優しさ、寛大さなど、そのような人に相応しいいかなる流儀においても現れる。（中略）philanthrōposは、自らの敵に対して慈悲深く寛大である。」（Martin, Hubert: The Concept of Philanthropia in Plutarch's Lives, in: American Journal of Philology, vol.82, 1961, p.174.）

136）注108を参照。

137）Richter, Will: Gedenkrede auf Prof. Dr. Dr. h.c. Konrat Ziegler, in: Göttingen im Februar, 74. Informationszeitschrift für die Universitäts- und Kongreßstadt, S.4.

138）有名な例は、『エジプトの神オシリスとイシスの伝説について』である。

139）Ziegler, Konrat: Rezension zu Der Hellenismus in der deutschen Forschung 1938-1948, hrsg.v. Emil Kiessling, in: Gnomon, a. a. O., Bd.29, 1957, S.72.

140）Cicero, M.Tullius: Pro T. Annio Milone ad iudices oratio, hrsg.v.Konrat Ziegler, Heidelberg 1949.

141）Cicero, M.Tullius: De legibus, hrsg.v.Konrat Ziegler, Heidelberg 1950.

142）Ziegler, Konrat: Zur Textgestaltung von Cicero de legibus, in: Hermes, a. a. O., Bd.81, 1953, S.303-317.

143）Cicero. Staatstheoretische Schriften. Lateinisch und Deutsch v. Konrat Ziegler, Darmstadt 1974.

Ⅳ.『パウリー百科事典』の項目執筆、編集

1945年、ツィークラーはミッテルハウスから同事典の編集責任者の任を引き継いだ（その後ツィークラーは1974年の死に至るまで、同事典から21巻を刊行）。ゲルトナーはツィークラーがこの仕事を引き継いだ心境を、次のように描写している。「ツィークラーには、すでに考え抜かれた次のような深い義務意識と不抜の確信が必要だった。すなわち教養人は（第二次世界大戦でのドイツの敗戦という）災厄に見舞われ皆が意気消沈している時代にあって、諦念に耽ったりエゴイズムに身を任せることは許されず、決然とした仕事、残されたものを保ち、未完成のものを続行し、破壊されたものを再建することを通して、他の人に範例を示さなければならない、と。」[144] ロッシャーが刊行を始めた『ギリシア・ローマ神話に関する詳細な辞典』を編集した経験が、『パウリー百科事典』編集責任者としてのツィークラーの活動に役立った。1962年からは、西洋古典学の専門家以外にも開かれた、『パウリー百科事典』に基づく『小パウリー　古代の事典』の編集者の一人となった（1975年に完結）。この事典において、396の項目の執筆を担当した。ツィークラーは第二次世界大戦後、『パウリー百科事典』の項目執筆にも引き続き携わり、363の項目を執筆した。その中には、「プルタルコス」[145]「ポリュビオス」[146] など、量・質ともに単著に値する項目が含まれている。『パウリー百科事典』の編纂は、ほぼ同時期に刊行が始まった『ラテン語大辞典 Thesaurus Linguae Latinae』の場合とは異なり、組織的に行われたわけではなかった。その際、ツィークラーが項目の執筆を執筆者の自由に任せたことが、優れた記事の執筆に繋がったことが指摘されている[147]。『パウリー百科事典』が20世紀の破局にもかかわらずツィークラーなどの尽力により完結できたことは、一種の奇跡として称えられた[148]。

第四章における検討の結果、ツィークラーは第二次世界大戦後もおおむね以前の関心を継続し、政治や研究に携わったことが明らかとなった。その際、彼の政治活動、一部の研究の中には、ナチズムへの当てこすりや反省が認められた。

結語

以上、第一章においては、ツィークラーの出自と経歴について整理した。第二章においては、ナ

144) Gärtner, H. : Konrat Ziegler, in: a. a. O., S.XⅢ.

145) Ziegler, Konrat: Plutarchos 2, in: RE, a. a. O., 41.Halbband, 1951, S.636-962.

146) Ziegler, Konrat: Polybios, in: a. a. O., 42.Halbband, 1952, S.1440-1578.

147) Mensching, E.: a. a. O., S.31.

148) Schuller, Wolfgang: Einführung in die Geschichte des Altertums, Stuttgart 1994, S.140.

チ政権の成立以前における彼の研究について考察を行った。第三章においては、ツィークラーによるナチズムとの関わり、それと彼の研究との関連を検討した。第四章においては、第二次世界大戦後の彼による政治活動と研究活動、それとナチズムとの関連を考察した。

ツィークラーの学問上の関心は、ギリシア・ローマの神話研究、プルタルコス研究、キケロ研究、『パウリー百科事典』、ヘレニズムの思想・文学研究のいずれにおいても、主に編集や伝承の問題に向けられていた。これは、19世紀ドイツにおける歴史学的－批判的な研究の系譜を継ぐものであった。この歴史学的－批判的な研究は古代ギリシアという規範の相対化を促し、ここから「第三の人文主義」は歴史主義を批判し、古代ギリシアの規範の再建を目指した。ナチズムも支配的な価値の不在という意識から、規範の再建を目指した。その際（主にオリエントを対抗像とした）アーリア人種とギリシア人の同質性が謳われたことなどから、「第三の人文主義」は大勢としてナチズムを傍観ないしはこれと協調するに至った[149]。しかしツィークラーは、「第一次世界大戦の動揺や、そこから生まれた文献学の（「第三の人文主義」という）方向転換からほとんど影響を受けず」[150]、古代ギリシアという規範の再建にも関心を持たなかった。時代遅れに見えた彼の研究上の関心は、ナチズムの誘惑からも自由であったと考えられる。

ドイツの第二帝政（君主制）から（ヴァイマル共和国による断絶を経て）第三帝国（独裁制）に至る父権的温情主義、ゲルマン崇拝の系譜に対して、ツィークラーは三月前期、ヴァイマル共和国から（第三帝国による断絶を経て）ドイツ連邦共和国へ至る普遍主義的でリベラルな、民主主義の系譜に属した。ヴァイマル共和国においては、その護持に力を尽くした。ヴァイマル共和国と第三帝国の下においては、社会的、法的な保護を制限ないしは奪われた（特にユダヤ系の）隣人を援けようと試み、援けた人々からの度重なる忘恩の仕打ちにもかかわらず、人間愛の発露に努めた。これは彼の研究に表れた古代ギリシア・ローマ以外の神話や宗教への関心、（時代的、ギリシア風の文化という両方の意味での）ヘレニズムへの理解、キケロに学んだ政治参加、（プルタルコスの作品から読み取った）人間愛などに担保されていたと考えられる。ツィークラーの同時代の人文主義において支配的な潮流であった「第三の人文主義」は、「政治的な人間の形成」を謳った。しかしその多くは言葉だけのものに留まった。これと対照的に「第三の人文主義」から距離を保った[151]

---

149) 拙論「人文主義者のナチズムに対する傍観－ヴェルナー・イェーガーを手がかりに－」前掲、pp.69-99を参照。

150) Mensching, E.: a. a. O., S.19. s.S.33.

151) ツィークラーは、「第三の人文主義」の一種の機関誌となった『古代』や『グノーモーン』に、1925年から1933年にかけて寄稿していない。また1930年にイェーガーの呼びかけの下ナウムブルクで開かれ、古典古代の規範の再建について論じられた「古典的古代学の専門家の会議」にも、招待されていない。(A. a. O., S.17.)「第三の人文主義」は、ヴァイマル共和国下に導入された「文化理解を目的とする学科」を、古典古

ツィークラーは、日々の政治と携わることを辞さなかった。

こうしたツィークラーの学問的、政治的な態度は、「半ば非政治的で、半ば明らかに反民主主義的なドイツの大学の雰囲気」[152] において異質であったように見える。しかし彼とよく似た学問的、政治的な傾向を示した人文主義者が、19世紀のドイツに存在した。それは、ローマ研究者のテオドール・モムゼン[153]（Theodor Mommsen）である。両者の間の共通点を指摘して、本論の結びとしたい。まず学問面について、モムゼンとツィークラーは古典研究において共に歴史学的－批判的な方法に主として依拠した。さらに、この方法に基づく大プロジェクトと携わった（モムゼンは『ラテン碑文集成』、ツィークラーは『パウリー百科事典』）。同時代のドイツにおいて根強かった古代ギリシア崇拝から、この二人は離れていた。学者としては研究に打ち込み、教育に強い関心を持たなかった。次に政治面について、モムゼンとツィークラーは、共に一時期、ドイツの大学の学長を務め（モムゼンはベルリン大学、ツィークラーはグライフスヴァルト大学）、政治的な理由で大学を解雇された経験を持ち（モムゼンはライプツィヒ大学、ツィークラーはグライフスヴァルト大学から）、リベラリズムに近い政党に属し政治的に活動した。両者は共に社会民主主義に期待を寄せ、「反ユダヤ主義を防ぐ会」に所属した。同時代の権威に対して、共に批判を行った（モムゼンの場合はビスマルク、ツィークラーの場合はゲーテに対して）。もっともツィークラーはモムゼンのように多くの弟子を持たなかった、という相違も挙げられる。大勢として非政治的であったドイツの市民階級は、ナチズムの台頭を招いた。これに先んじてモムゼンは1902年に記された遺言（1948年に公開）の中で、ドイツの市民階級の政治的な未成熟を嘆いていた[154]。しかしツィークラーはヴァイマル共和国護持への尽力、ナチズムへの抵抗などを通して、その例外を示す存在となったのである。

謝辞：本論文は、平成29年度科学研究費助成金（基盤研究 C、課題番号17K02265）による研究成果の一部として公表するものである。本論文を執筆するための資料収集の際、グライフスヴァルト大学資料館、ゲッティンゲン大学資料館、ゲッティンゲン市資料館などのお世話になった。関係者の方々に感謝を申し上げる。

代の規範の相対化を促すものとして批判した。他方ツィークラーが当時、行った古代ギリシア・ローマ以外の神話や宗教に関する研究（第二章Ｉを参照）は、むしろ「文化理解を目的とする学科」に沿うものであった。

152) Bracher, Karl Dietrich: Die Gleichschaltung der deutschen Universität, in: Nationalsozialismus und die deutsche Universität, Berlin 1966, S.142.

153) モムゼンについては、拙著『人文主義と国民形成　19世紀ドイツの古典教養』（知泉書館、2005年）pp.249-309を参照。

154) Mommsens Testamentklausel, in: Die Wandlung, Jg.3, 1948, S.69f. s. Wucher, Albert: Theodor Mommsen. Geschichtschreibung und Politik, Göttingen 1956, S.219.